平12(2000年)3月31日

縄タイムス　　第3種郵便物認可

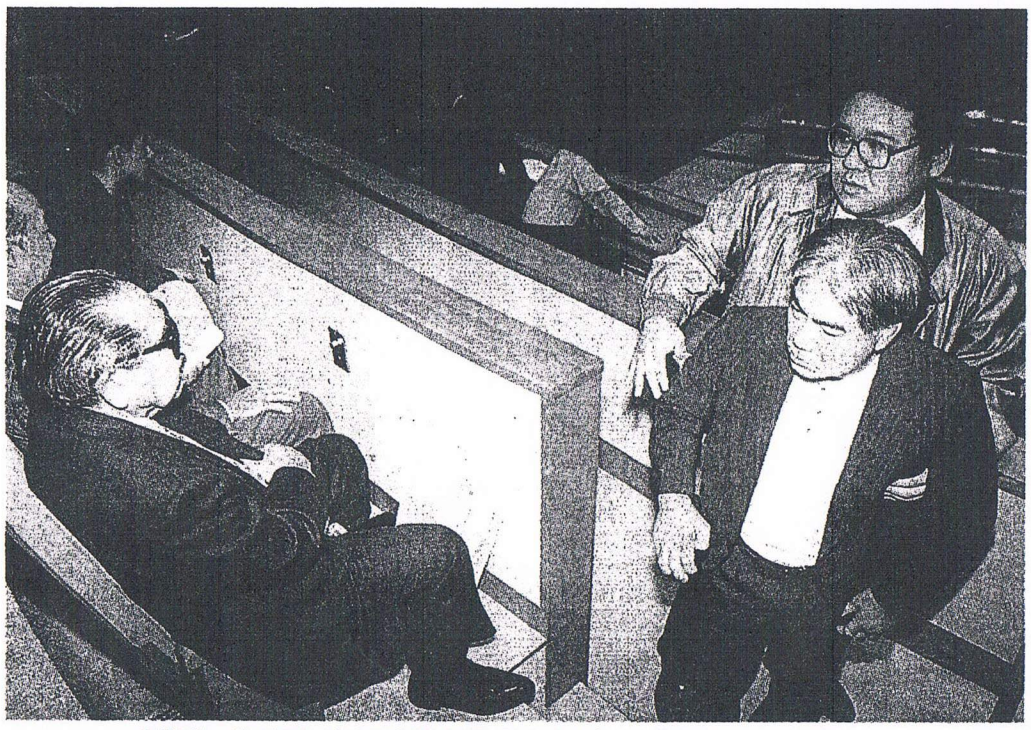
論議もせず採択

一坪反戦地主排除

地主ら一斉に非難

陳情提出者　傍聴席で「万歳」

「論議もなしに、私たちの基本的人権が奪われていく。『新しい戦前』の始まりだ」―。三十日、『一坪反戦地主など』を県の外郭団体の役員から排除するよう求めた陳情をめぐって、揺れた県議会。陳情通過の瞬間、議場内に一坪反戦地主らから非難の声が上がった。採択では与党議員全員が賛成で起立、これに対し野党議員は座ったまま反対の意思を示したが、二十六対二十一の賛成多数に。傍聴席中央で、陳情提出者は日の丸の扇子を振って万歳の声を上げた。



採択後、傍聴席に座る陳情提出者（左）に対し、「許せない」と迫る一坪反戦地主の関係者は、静止される＝県議会傍聴席

「例えば、岸本建男名護市長も一坪反戦地主だ。彼も県の外郭団体に名を連ねてならないことになる。この陳情を採択することこそ、憲法違反だ」

「沖縄戦の体験を基に、戦争に反対し平和を願うことが、民衆に暴動を起こさせることと同じか。戦前、日本軍が各地を侵略し、最終的に国民を破滅させたのではなかったのか」

討論に立った伊波洋一県議（結の会）から反対意見のトーンが上がるたび、傍聴席から拍手が起こった。議長や係員から「静粛に」と静止される場面も。

しかし、革新系議員の反対に対し与党側から賛成討論は出ず、そのまま採決。審議は淡々と進んだ。

この日、採択があることを報道で知った地主会会員らは、午後の再開、採決を前に午前に発表した声明文を携え、各会派をめぐり陳情採択阻止を訴えた。

共産、社大、社民の控室では「どうしてこのような大事な内容の陳情を知らせなかったのか」と革新系議員をただすなど、「数の力」による審議採決が迫り、一坪反戦地主らはいらだちを隠せない。

与党最大会派である自民党の控室では声明文の受け取りをめぐって押し問答。退室する議員もいた。

採択後、「賛成討論もない」「県民不在の審議だ」などと一坪反戦地主らの怒りは収まらず、傍聴席入り口で今後の方針など確認。その足で議会内の会見場へと向かった。

会見で崎原盛秀代表世話人は「積極的に賛成できない、党議決定なので仕方がない、陳情内容をけさ知ったーなどという与党議員もいる。内容を知らないまま賛成に回るとは許されない」と怒りをあらわにした。

「平和祈念資料館問題でも、反国家的なものはいけないとか歴史を改ざんする方向性を示してきた。ファシズムが如実に表れ、『新しい戦前』が沖縄からつくり出されようとしている」と県政、議会与党を強く非難した。

議会前での集会に参加した一フィート運動の会の中村文子さん(六七)は「言論の自由が保障された戦後五十年の総括が、この結果とは…。戦争を体験した沖縄だからこそ、言論の自由の大切さを知っていると思っていた。沖縄の県議会がここまでくるとは…」と悔しがった。

県民を指導すべき人が偏った思想はおかしい

陳情を提出した「沖縄県政を糺（ただ）す有識者の会・国旗国歌推進沖縄県民会議」の恵忠久会長（反戦地主）たちの目的は、たとえ軍用地にせよ、自分の土地を公共の福祉のために使わせないことだ。日米安保条約を廃止する歴史観を持つ人が、公共団体の長となることはおかしい。平和祈念資料館の監修委員など、県民を指導すべき立場の人が偏った思想を持つのは前県政のなごり。稲嶺県政になって一年がたつが、現状が変わらないので昨年九月、陳情した。しかし県などの職員、選挙で選ばれる首長や議員が対象になるとは考えていない。

沖縄タイムス　平成１２年（２０００年）３月３１日